

パラリンピックから学ぶ！

障がいのある人を「ささえる」みち



『失われたものをかぞえるな、残っているものを最大限に生かせ』

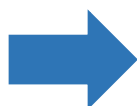
～イギリス ストークマンデビル病院 Drグッドマンの名言～

“手術よりスポーツを” 第二次世界大戦で負傷した兵士に、リハビリテーションや自立・社会参加のための手段としてスポーツを取り入れたことをきっかけとし、病院の大会から国際大会に発展し、やがて世界最高峰の競技大会である「パラリンピック」となりました。



60 年前

病院で行われた車椅子バスケットボールの大会
(1953年 イギリスのストークマンデビル病院)



現在

現在の車椅子バスケットボール
(2016年 リオデジャネイロパラリンピック)

『健常者は運動をした方がよいが、障がい者は運動しなければならない』

～元車椅子マラソン世界記録保持者 ハインツ・フライ選手の名言～

障がいのある人たちにとってスポーツは、残っている機能や能力を最大限に引き出してくれる“**ストレンクス**”そのものであり、スポーツ活動によって、体力や生活機能の維持向上、障がいの受容、コミュニケーション力、社会性にポジティブに影響します。また、生活習慣病予防や二次障害を予防するためにも、障がいのない人たちよりも、むしろ障がいのある人たちこそスポーツ活動は大切ですが、障がいのある人たちにとって「ひと」や「用具」の支えは不足しています。お互いに支えあい理解しあうことで環境や街が変わり、そして2020東京オリンピック・パラリンピックが成功するのです！